

生活支援体制づくり協議体（地域包括支援センター細江
担当圏域レベル）開催報告書

1 開催日時	令和 7 年 1 月 27 日（月） 10 時 00 分 ～ 11 時 40 分
2 開催場所	みをつくし文化センター 大研修室
3 参加者	25名 委員11名（細江地区5名、引佐地区3名、三ヶ日地区3名）、関係機関14名（浜松市高齢者福祉課：1名、浜名福祉事業所（北）長寿保険担当：1名、コミュニティ担当：1名、地域包括支援センター細江：3名、市社協浜松地区センター：1名・北地区センター：7名）
4 協議の内容	<p>1. 開会</p> <p>2. 挨拶 生活支援体制づくり協議体 会長</p> <p>R4～5年度はごみ出し問題について取り組み、自治会から班長会にまで話を通して良い意見交換ができた。R6～7年度の防災に関しては今回で3回目となり、学習する・勉強する・知識を身につける1年目が終わる。せっかく1年間研鑽した中での集約なので、来年度はそれを活かしたい。協議したものを地域へ、なんとか良い方法で落としていって、地域の方が「これならいいわ」という話が出てくるのが私どもの目的。3月に役員改正で退任される方については、それぞれ継続の引き継ぎをお願いしたい。</p> <p>3. 協議内容</p> <p>令和6年度 テーマ「災害時の連携について」</p> <p>地域やご近所の特性と危険を知って、風水害と土砂災害に備えよう</p> <p>～自分と家族の備え、地域の備えについて考える～</p> <p>① 令和6年度 第2回協議体会議の振り返り *10.28開催議事録参照</p> <p>②情報共有</p> <p>①浜松市社協 北地区センター センター長から</p>

資料1の、災害関連死について調査したフローチャートによると、避難所の劣悪な環境が関連死を招くことが分かってきている。そのため、48時間以内にトイレ(T)と温かい食事(キッチン・K)、段ボールベッド(B)を提供していこうという方針に変わりつつあり、市の地域防災会議の中でも議論されて今後対応していくとのこと。これが浸透すると1人の占有面積が広がるため、おそらく現在の避難所収容可能人数が削減される。それで溢れてしまう人たちをどうするのかという問題が出てくる。

②防災動画鑑賞

(1)NHK「水害から命と暮らしを守る」シリーズから

大雨・豪雨時の避難 徒歩で？車で？ 移動手段ごとの危険と注意点 (3:18)

https://www.nhk.or.jp/shutoken/shutobo/sonae_suigai_06.html

(2)NHK 防災 から

防災の知恵「水害時『命を守る行動を』と言われたら」(0:59)

<https://www.nhk.or.jp/bousai/articles/21468/>

(3)NHK 防災 から (土砂災害について)

「長雨蓄積型」に注意 西日本豪雨など大規模な災害につながるおそれ (3:08)

<https://www.nhk.or.jp/bousai/articles/21257/>

② グループワーク (もっと身近な防災マップ作り・拡大版)

地域ごとに情報を共有し、前回よりも更に大きな地図に地域全体の防災情報を、分割した小さな地図には自宅周りの防災情報を丁寧にまとめてみよう

<グループワーク概要>

国土地理院の地図をA3サイズ(縮尺100m表示=実寸1.3cm)で印刷したものを小さな地図とし、それを張り合わせて地区を網羅した大きな地図を細江・引佐(南北)・三ヶ日(南北)の3地区5枚用意

- 1) 避難所と緊急避難場所の一覧・各種ハザードマップ・過去の被災記録から避難先と危険個所を確認し、住民だからこそ知る危険個所や公式避難所以

外の一時的に避難できそうな場所、災害に関する史跡や言い伝えなども意見交換してマップに落とし込む

- 2) 上記をもとに、小さな地図で自宅から避難可能な範囲を確認し、第2第3の避難場所候補や在宅避難について考える
- 3) 自分（自助）と地域（共助）が事前にできる備えを話し合う・・備蓄する品と運用方法、避難訓練のあり方、避難困難者との関わり、避難経路の整備、連絡情報網の構築、地域への周知など
- 4) 家族や近隣住民などに情報共有できるよう、自宅周りの小さな地図を持ち帰ってもらう。自治会やシニアクラブ等で活用してもらうため、地区全体の地図も提供

<グループワーク後の発表>

三ヶ日：助かるための事前の備えと避難後の話は分けて考えないといけない。

今日は避難所に行くまでのこととして危険箇所の確認などを行った。場所ごとに特徴があり、備えなければいけないリスクがそれぞれ違う。大事なのは、避難所に行けばなんとかなると思込まないこと、各自がきちんと関心を持って自分事として正しい情報を取りまとめること、自宅に留まれない時にご近所のお宅に避難させてもらえるような付き合いを普段からしておくこと。これを地域の人にどうやって伝えていくかが課題。

引佐：地形が様々なため各々の場所でリスクが違うが、どこでも何かしらのリスクがあると言っていい。直線距離は遠くなくても高低差や道の蛇行があるために行くのが困難な避難所がある。南部は液状化のリスクが高く、一部では土砂災害の恐れがある。北部には薬局や医療機関がかなり少ない、あまり知られていない所に実は盛り土がある、ラジオなどの電波が入りにくいエリアが多数ある、という問題が共有された。一方で、田畑や井戸があることから飲食に関してはやや安心できるのではないかと。第2東名があるのも安心材料。

細江：令和5年6月の大雨と七夕豪雨のを中心に危険個所を確認した。浸水した地域にも排水機場が何ヶ所かあるが、大雨の際は機能が果たせずに結局また浸水してしまうのでは、という心配がある。緊急避難所になっている19ヶ所の防災センターは備蓄物資が無い、もしくは十分でなく、食事提供も難しい。住民が緊急避難所の機能について理解を深める必要がある。避難所に指定されている小学校が古くて、かえって危ないかもしれず、自宅等での垂直避難や、近隣の寺や神社も避難場所として活用できるといい。

5. 令和7年度開催（案）について

*受託内容が確定次第、日程調整を行う

6. 閉会挨拶 生活支援体制づくり協議体 副会長（ふじのくに防災士）

今回のグループワークで話したり知ったりしたことを、どうやって下に落とししていくかが非常に大切。災害時には自分の身は自分で守る、自分の身を守れたら他の人を助けるといふ、この自助・共助・公助の順番をよく理解して、今後もこの活動に活かしていただきたい。本日はご苦労様でした。

5 今後の見通し

必要な対応

2年計画「災害時の連携について」の1年目で、地域の特性や自宅周りの危険を把握して自分の身は自分で守るための知見を深めたが、自助のほかに共助・互助・公助の必要性が改めて認識された。自治会長交代等によって協議体会議参加者も交代となる場合があるため、1年目の知見を無駄にしないよう引継ぎを行い、2年目は各所との連携を模索しながら地域の防災活動の活性化を考えていく。